

第 70 回 バートン・ホームズの見た 1922 年の松江

バートン・ホームズ (Burton Holmes, 1870-1958) というアメリカ人写真家をご存知でしょうか。商業的に成功しすぎたためか、学術的な写真史の本にはあまり登場しませんが、1890～1930 年代に世界中を回って観光写真を撮影し、彩色したスライドを演説付のショー「トラヴェローク」に仕立ててヨーロッパ各地で上映し、大人気を博しました。

好奇心とユーモアにあふれた人柄だったようで、彼の撮影したアジアやオセアニアの人々の表情には警戒の色もなく、自然な笑顔が見られます。これは 19 世紀の民族学写真の被写体がまるで標本を撮影したかのようにほぼ無表情であるのと対照的で、実に温かい。そして、バートンは明治から昭和初期にかけて何度も来日しており、日露戦争では現地で公式報道カメラマンを務めるなど、日本と関連の深い写真家です。



さて、そのバートンは松江にもご縁があります。と言うのも、彼はホートン・ミフリン社版のラフカディオ・ハーン全集 *The Writings of Lafcadio Hearn*, 16 vols. Boston: Houghton Mifflin, 1922-23. の挿図を担当し、この地で沢山の写真を撮影しているからです。

大正 11 年 (1922) 5 月 13 日、バートンはハーンの長男・小泉一雄とともに来松。この際、バートン所望の松江城山や宍道湖畔・和田見新地・社寺など市内各所を案内したのが、松江の素封家で美術工芸研究家の桑原羊次郎 (1868-1955) です。前掲のハーン全集 5・6 巻所収“Glimpses of Unfamiliar Japan”(邦題：「知られぬ日本の面影」)をはじめ、各巻随所に添えられた松江の生き生きとした写真は、この時に撮影されたものでしょう。以下、写真は島根大学附属図書館所蔵の同全集 5・6 巻 (左図：5 巻中扉) の挿図写真から。



(写真左) The Long White Bridge at Matsue



(写真右) Tenjinmachi, the Street of the Rich Merchants, Matsue



(写真左) The Katchiu-yashiki (the Ancient Residence of a Samurai of High Rank)-the House where Hearn lived in Matsue



(写真右) Hearn's Yashiki in Matsue, from Garden

現代では写真の特徴をしばしば「一瞬を切り取る」等と表現しますが、露光時間の長い当時の写真には、むしろ一定の時間の流れがぎゅっと凝縮されていて、被写体の息遣いが聞こえてきそうです。大橋を渡る天秤を担いだ物売り、おくるみに赤ちゃんを抱いた日本髪のお母さん、橋の向こうには松江キネクラブの白い建物。天神町の商店街を行き交う着物の男女、大八車。また、ハーン旧居の座敷にいるのは、もしかしてこの武家屋敷の持ち主で第一次「八雲会」の発起人のひとり、根岸磐井さんでしょうか。

そこに閉じ込められた大正期の松江の美しい佇まいは、何とも懐かしく魅力的です。

桑原羊次郎は、バートンとの珍道中や彼の最新式の撮影機材への驚きを、後の八雲五十年忌に際し「八雲先生離松後の 30 年」(『山陰新報』1954 年 10 月 3 日)として寄稿しました。少しご紹介します ([] 内は引用者補遺)。

[[前略] 大正十一年五月十三日、北米のバートン・ホルムズ氏が小泉一雄君を同伴して、来松するとの報に接して、私は之を駅頭に出迎え、相伴ふて皆美館に案内し、両氏は茲に投宿せられました。

バートン・ホルムズ氏来松の目的は、ヘルン先生が、曾つて歴訪せられし、大社、一畑薬師、加賀潜戸、松江城山、天倫寺等の神社仏閣名所旧跡が、先生離松せられし明治二十四年より、大正十一年に至る、約三十ヶ年後に、如何に興廃変遷して居るかを研討して、八雲全集の或部分に対して追加増補を加へて、更らに紐育に於て出版せんとの為め、来松せし次第なりと告げられて、私どもの協力を求むるとのことでありました。

[中略] 或る日のこと、ホルムズ氏は、ヘルン先生が、乃木浜の栗原屋庭前より宍道湖の入り日を眺められたる其文章が如何にも名文ゆへ、是非とも此入り日を同時刻に眺めたいと云ふのでありまして、其帰路に天神川より大橋川に通ずる横堀(今の天神町通り)を通り、和田見遊郭の夜景を観ると云ふことでありましたが、一雄君は遊郭に入ることは閉口なり、御免を蒙りたしとのことで、私共両人は二人船頭の舟を傭ふて、之を皆美館の裏岸に待期せしめ、時の移つるを俟つていました。暫くするとホルムズ氏は、時計を見つめて居たが、それ時刻だと云ふので、早速私共両人は飛び乗つたが、一雄君は腰を上げられない。ホルムズ氏は時間が遅れては、日没が見られない、大変なりとて、大急行の二本棹で、乃木浜に上陸して栗原屋を訊ねたる処、栗原屋は既に先年廃業し、其屋敷趾は畑となり居ると聞き、早速其場所に駆けつけたるに、ちょうど時刻はよいとて大喜びで、西の方を眺めた処、白雲がたなびきて山をかくしてゐたので之を見た氏は大に落胆せられま

したが、実に天幸と申すべきか、見る見る間に、其叢雲は忽然として吹払はれ、日没の際は、洵に氏の御詠通りの晴れ模様となり、三十年前に、ヘルン先生の眺められたると同様の、日没の風物と情緒を満喫し得て、非常なる愉悦と大満足で、是は洵に大成功でありました。

〔中略〕 其他市内の社寺を巡回せしやに思ひますが、一々覚えて居ませぬ。唯当時気付たることは、氏所携の写真器の取枠の所に、一種の装置があつて、一ダースのガラス種板が仕込まれ、写す毎に、其一枚宛が倒れ落ち、後から後からと新種板と交代して、写さるゝと云ふ仕掛けであつた様に見え、一日少なくとも二ダース位は写された様に見受けました。宿に帰れば、早速其取枠をはづしてトランクに収め更に新板を容れて毎日携へ歩かれたる様でした。

或日、氏は落合〔和太郎〕君と私と宿の女中さんと三人の写真をとり記念として贈られ、又た私には、御礼の意味か、金張りのシャープ・ペンシルを贈られました。今も手許に保存してあります。〔後略〕

現代においても、観光客の皆さんは多かれ少なかれ、「ハーンの眼に映ったあの風景」を期待して、松江に来られているのではないのでしょうか。約 100 年前のバートン・ホームズさえ既にそうだった、ということに驚くとともに、ハーンの影響力の大きさをあらためて感じます。

(松江市史料編纂課・村角紀子／2017 年 12 月 18 日記)